

死ぬるとは我は思はじ南無阿弥陀
佛 今生ると申すばかりに
聖句
徳本上人



第 75 卷 468 号

<http://canchiin.net>

Email. shinsei@canchiin.net

平成29年10月15日
1・4・7・10月15日発行
発行所 真生同盟本部
〒105-0011
東京都港区芝公園
2-2-13 観智院
振替 00160-6-80674
電話 03(3431) 1450
編集兼発行人
土屋正道

会費 年額 2,000円
部 100円

御導師

大本山増上寺八十八世法主

八木季生大僧正台下

表葬儀差定
一、開式

一、御導師・式衆入堂

一、読経・念仏

八月十九日(土) 十三時より大
本山 増上寺光摂殿講堂にて眞生
同盟主幹・観智院名誉住職・土屋
光道上人の表葬儀が厳粛に執り行
われました。

式衆
芝山内寺院諸大徳
司式
東京教区西光院若林隆壽上人

智徳心院青蓮社紅譽上人

念阿華開見佛光道大和尚 表葬儀



香語
弔辞

総本山知恩院門跡

伊藤唯眞猊下

浄土宗宗務総長

豊岡鐔尔上人

檀信徒総代

谷口英夫様

眞生同盟道友代表

森島米史郎様

焼香

授与十念

御垂示

一、御導師・式衆退堂

一、法嗣謝辞

一、閉式

香語

大本山増上寺八十八世法主

八木季生 大僧正台下

恭しく惟みるに善導大師日没無常
偈に曰く

人間勿々として衆務を営んで
年命の日夜に去ることを覺らず



燈の風中に消えなんこと期し難

きが如し 云々と

大本山増上寺教監

観智院名誉住職 真生同盟主幹

智徳心院青蓮社紅譽上人

念阿華開見佛光道大和尚

無常の風突如として吹き来たり
て 健常たりし上人のこの世の灯
火吹き消さる

時まさに本年六月二十六日 世

寿八十九歳のことなり

上人は昭和三年 観智院・土屋

観道上人の長男として生を受け長
じて東京大学にて宗教学の真髄を
学ばる

昭和三十四年増上寺にて伝宗伝

戒を受けて後 上人のたぐいまれ
なる求道心は師父・観道上人のも
とでさらなる展開をとげ 教化・
伝道に専心し 法然上人の念仏教
化に専念される

その姿は 観智院住職 真生同

盟主幹にとどまらず

東京教区教化団長 増上寺布教師会

会長 浄土宗総合研究所客員教授

他 様々などところで広く宗門檀

信徒に知れ渡るところであり念仏
信仰の隆昌を計らる

上人の伝道は常に情熱を以って

青年僧侶に力を与え信州唐沢山に
大正大学伝道学の指導となり鎌倉
大仏の徹夜念仏となり一切衆生に
与えられた仏性を活かし法然上人
の念仏信仰を現代に実践する活力

となった

しかるに弥陀の大悲召喚のみ声

に預かりて 彼土に化を遷されし

は哀惜の極みなれども 彼土に於

いて十地の願行円満に成就し給い
大威神力を以って此土衆生を化益
されることを切に願って惜別の辞

となさん

各留半座乗華葉

待我閻浮同行人

大本山増上寺 八十八世

戒譽 季生

弔 辞

檀信徒総代 谷口 英夫

光道上人 名誉住職

春のお彼岸の時にご法話をお話

しいいただきました。すっかりとし

たお話しでした。以来三か月まだ

まだお元氣でお過ごしと思ってい

たところ突然の悲報に接しました。

それもおかくれになる数時間前に

正道上人とお話しなさっていたと

伺い、こんな劇的な最期が本当に



徒弟法道 法類功德林寺・妙定院 焼香

あるのだと驚きました。

東大を出たお坊さん、気高く柔
らかい物腰のお坊さん、観智院の
誇りでした。お話しが大変お好き

でご法話はだいたい時間をオー
バーされていましたね。

予定された終了時刻になると正

道上人から紙が回ってきました。

「あ、時間ですね」

それからその日のテーマをお話
しになりました。あらかじめ用意
された刷り物を読んだり「千の風

になって」を歌ったりそして頃合
いになると「時間です」というこ
とばで終わるといふパターンでし
た。この親子のやり取りもまた楽
しみのひとつでしたが、もう何う
ことはできません。

本日、祭壇の真ん中におられる
阿弥陀様、名誉住職はこの佛画の
開眼に大変な情熱を注がれました。
もとは江戸期のものだそうですが、
損傷が激しく修復に出したものの、
良い結果を得られませんでした。

そこで全く新しく平成の世を救
う阿弥陀様の製作を発願されまし
た。その情熱は東京芸術大学の宮
廻教授に伝わり、教授のご指導の
もとで東京芸術大学の精鋭スタッ
フとの共同作業が始まりました。暑
い日も寒い日も名誉ご住職はス
タッフの一員として毎月上野の芸
大に通われたのです。

このような経過を経てこの阿弥
陀様は後世に残る美術品として完
成されました。

観智院の宝物のひとつです。

『忘れな草をあなたに』先立た
れた奥様の一周忌にお出しになっ
た追悼集を改めて読ませていた
だきました。大切にされていた奥
様との愛とご家族の絆が書かれて
いました。ご高齢にしてこのよう
な愛が語れるのは素晴らしいこと
だと思いました。いまはお二人水
いらずでお過ごしのことでしょう。
名誉ご住職たくさんさんの御指導有
難うございました。どうぞお浄土
でもお元気で過ごして下さい。

合掌

平成二十九年八月十九日

観智院檀信徒総代 谷口英夫

弔 辞

眞生同盟道友代表

森島 米史郎

土屋光道先生 光道先生ここに
お別れの言葉を述べるのは誠にか
なしくつらい事であります。

昨年、観智院における眞生同盟

本部大会でお会いしたおりに米
寿を一昨年ご家族やここにお越し
の方々とお祝いされたとお聞きし
お元氣そうにしておられましたの
に：

眞生同盟は光道先生のお父上で
ある観道上人が『この世の私たち
は仏様に生かされている存在であ
る…』という理念の下に始められ
た運動を念仏実践により続けてき
た会であります。

現在はご子息の正道さんが眞生
同盟の副主幹をしておられます。
私の父、真逸が観道上人に九十年
ほど前からお教えを受けお上人が
お隠れになられてからは、光道先
生をはじめご家族の皆様とも親し
くさせて頂いております。

亡き父が病床に伏せている際に
は、正道さんと数名の同友と共に
大阪の自宅までご来訪頂きお念仏
を朗々と唱えておられる光道先生
のお姿が思い返されております。

光道先生…我々は眞生主義の
教えを胸に念仏実践により暮らし

ていきます。

光道先生から頂いたお教えに厚
く御礼申し上げますと共に、冥福を
お祈りいたしましてお別れの言葉
と致します。

平成二十九年八月十九日

眞生同盟

森島米史郎



八木台下 御垂示

眞生の意義 (一)

土屋 観道 上人 (眞生同盟初代主幹)

眞生とは如来を中心とせる人類生活の謂である。宇宙の本体、萬法の本源を尋ねては神の創造を考察し、人類生活の理想を究めては自

も財産の蓄積も名譽の本質も畢竟唯この神人の生活を完成し、佛陀の生活を体现する上にのみ其の存在の意義を為すものである。

ら佛陀の生活を創建す、永遠の生命と無限の向上との要求も亦この完成に外ならぬ。宇宙の本体何物ぞ、萬法の本源、神の实体、如来の本質、探ね来れば一として不可思議ならざるなく、吾人は何故か自

静かに思えば宇宙の創生も、文化の進展も、人類發生の本質も、此の理想実現の上にこそ眞実生活の妙諦を味うことができるのである。

己の本体と宇宙の本体とを比較し、自己の本源と萬法の本源とを探ね、自己の实体と神の实体とを考え、自己の本質と如来の本質とを考究せずにはいられない。今や吾人の要求は人類生活の理想を探ねて神の生活と共鳴し、如来の理想と合一するの要求に自覺した。

愛も、この神を中心とし、如来を中心としたる人類生活の上にこそ、始めて眞実の意義を為すものである。されば人類生活の根本要求は常恒にこの理想を理想とし、神の国、佛の国を理想とし、自ら生きんとする根本運動という可きである。神を礼するも、佛を拝むも、其の心の本源は自ら神の生活を要望し、佛陀の生活を体现せんとする本具佛性の自我実現という可きである。悠久たる天地の間少しく眼

永遠の生命も此の上に見出され、無限の向上も此の上のみ確立せられて来るのである。生命の存続

を大にして、天地創造の進展を眺め、萬有展開の秩序を究め来る時、宇宙創成の昔より人類理想の進展は刻々として一大理想の実現として発現せられ、人類の發生、民族の移動、国家の興亡、個人の生滅、眺め来れば一として此の神人生活の完成に進み来らざるはないのである。大にしては日月星辰、小にしては萬法一塵の起滅運行に至るまで、一として宇宙大道の本心に違するものはない。

さはれ、今時の欧州大戰の社会生活の困乏となり、世界思想の動乱は人心不安の状態となつた、これはたして人類生活の幸福といふべきか、少なくとも此の不安そのものの生活に於ては決して望ましきものではない。所謂物質文明の余弊として人類生活の平和を破壊し、人類文化の進展を毀損し、社会生活の安泰を危からしむるものである。然し乍らこれ主として、宇宙進展の大道を誤まるによつて来る人類私欲の変調に過ぎず、かくて時

代は進展し、展開して、来るべき人類平和の要求は各人生活の反省となり、理想実現の一大転期は創生されつつあるのである。今や奴隸的人類生活の時代は過ぎて、自由と正義と平和を求むるの自覺となり、更らに人類生活の本義を研めては永遠の生命と無限向上の世界とを發見し、永劫変わりなき人類理想の天地に生れ、初めて人生至幸の眞義を悟り、眞人生活の妙境を觀じては理想実現の妙諦に徹し、人類生存の意義に觀じては神人生活の体现を期するに到るものである。斯の如きの萬有進化の發達は宇宙萬法の本源より本末一如の自覺となり、萬法歸一の妙境は如来中心生活となる。されば吾人の眞生は斯かる眞実の要求であつて人類生活の根本規範であり、又これ人類生活の中心生活である。

(一九三二年二月)

(次号へ続く)

娑婆の念佛は応急の救済にして

往生以後は永久の誘引

『佛教精神講和』より

中島 観琇 上人

実に応急の御救済を仰ぐのである、
それから後は、御誘導で、成佛に至
るのである、実に長時長劫報慈恩
と仰ぐべきである。

螢ほどの光もなき身より日月に まさる光を放つ身となる

『御慈悲のたより』より

山崎 弁栄 上人

いたづらに光陰をすててをお
もんばかりざらん。おもえばおもえ
ば我等何の幸になる哉。

阿弥陀如来の本願に乘じ、煩惱
具足の凡夫そのままに、智慧をも
みがかず、戒法をもたもつこと能
わざる浅ましきもの、この罪惡生
死の凡夫を、容易ならざる地上の
ぼさつすら登ることの出来ぬ報身
浄土へ、往生することは、螢ほどの
光なき身より日月にまさる光りを
はなつ身となること、石や瓦が変
じて黄金となることなれば、これ
に過ぎたるめでたきことはなかる

吾々が、此の阿弥陀如来の光明
を、頂く場合には、最も応急のご利
益に預かるのみは触光柔軟の御利
益である、是れは今、吾々が四圍境
遇というものが、所謂、娑婆である
から、見るに附け、聞くに附け、自
然に貪瞋煩惱を、起こさねば成ら
ぬ因縁が待つて居るのである。去
りとして、その因縁の引くが儘に、任
せたならば、水火の二河に墜落す
るより外に道が無いのである。此
の場合に、佛の大悲を思つて、念佛
相續するときに、不思議にも、直ち
に三垢消滅の御利益を蒙ること
が出来る、之を触光柔軟の御利益
とも名づけてある。弥陀大悲の光
明は、素より平等に照らし給えど

も、念佛の時にあらざれば、その光
明を真受けに受けることが出来
ぬ、それ故に「斯の光りに遇う」と
いうのは、念佛を称うるときのこ
とをいうのである、是れは今日お
互が、日々に蒙る所の御救いであ
る。けれども此の娑婆は、退縁の多
い処であるから、臨終の夕、御来迎
のその時までには、油断大敵の心懸
けが大切である。而して「此の臨
終来迎」ということが、此の娑婆最
終の御救いである。それから後、成
佛に至るまでは、最早浄土の修養
であるから、自然任運に、佛の御引
立てにて、進むことが出来るので
ある。されば吾々が、同じ佛の御教
を蒙るとはいえ、此の現世一生は、

つらつらおもんみれば我等は
生死流転の凡夫、曠劫よりこのか
た、苦海のなかに沈みつつ、いまに
於いてなお出離のみち猶得がたし、
しらずくらきよりくらくにさまよ
い、苦より苦に入り、彼こに死して
此に生まれ、只眼前の名利にまよ
いて、一大事の要路もとむるころ
ざし浅く、草露のもろき身をかえり
見ず、無常の日夜に命をやくことを
はからず、朝露電光のすみやかなる、
我身にあてて見ずんば、はなはだあ
やまりなるべし。入出の息をさえ
うっかりとはならざるなかに何ぞ

仏に会う

土屋 光道 上人 (眞生同盟二代主幹)

べし。そのかたじけなさを忘れていたづらに月日をすぎることはおろかにて候なり。ねてもさめても称名を忘れ給うことなかれ。

この世において、仏様に遇うことは難しいと申しますが、仏様とはどんなにすばらしい方でしょうか。

生ける仏陀釈尊に、或は如来様に、二度でもよい眼のあたりにお会いしたいという願いは、後世の仏教徒がひとしくその胸に懐く望みでありましょう。そこから、観仏、見仏、念仏三昧とか、極楽浄土に往生して尊体を拝むとか、仏の来迎にあおうという行いが、仏教の中に一つの大きな流れを形成したのだとも考えられます。

さて、その釈尊や如来像は、原始經典から大乘經典に移りゆくに從つて、多くの仏身觀を生じ、愈々神秘的超越的な表現を以て描かれ

き仏なしとする教えもあるし、一切衆生、瓦礫草木に仏性を見る諸法実相の教えもありますが、仏教に限らず、高等な宗教にあつては、人間がその門に入るのは、一挙に絶対に直入するのではなく、人間としての教祖、乃至師匠との人格關係を通して、人格的眞如に出会うという経路をたどる事が多いのであります。従つて、その時代、その機に應じて、仏が色々の姿でとられますが、常に讃仰と同時に、そこに衆生の思慕面接の情が色濃くにじみ出ているのであります。

ともかく、宇宙の理法、慈悲を體現した覚者に、一度でも直々にお会いしたい、そして、その氣高いお顔を拝し、やさしいお言葉をいただき、そのおみ足にでも触れることができたなら、どんなに嬉しいことだろう。汚濁の心も浄められ、どんな悩み苦しきも癒されて、法悦に身もふるえるばかりだろうと思うのであります。

しかし、この場合、注意すべきは、仏身の側だけでは問題が解決せず、会いたがつている自分自身の側に問題があることであります。私共がどんなに会いたいとあこがれていても、実際に出会つても、それが仏様と気づかない場合が全く多いということでもあります。

釈尊は、樹下成道の喜びの中に、まず最初に、一体誰にこの法を理解してもらおうかと色々考えられたのであります。その結果、仏陀伽耶の地から二百数十料もへだてた鹿野苑の地に修行する五人の比丘を選ばれ、炎天下、遠路はるばるおたずねになったのであります。

原始經典には「わたしは、一切勝者、一切智者である、何ものにも汚されることなく、すべてを捨離し、渴愛なく、解脱した。この世に比類すべきものがない、この世の応供、最高の師である。われひとり正等覚者にして、清く寂かな涅槃を得たのである。いま法輪を転ずるために鹿野苑に行く、盲闇の世間において甘露の

鼓をうとう。」と、その心中が語られていきます。

思えば、多くの人の中から、初転法輪の相手として選ばれ、わざわざ二百料を超える道をたずねていただいたこの五人の比丘は、まことに仏縁深き幸せな人達と云えましょう。ところが、経典の語るところによると、五比丘達は、沙門ゴータマは、苦行を捨て、奢侈に墮した者であるという先入観をもつて、一向に釈尊の話しを聞こうとしなかった。

「わたしは精進をすてたのではない。奢侈に墮したのではない。わたしはいまや如来となつた。世の供養に値いするもの、最高の覚者となつた。なんじらはよく聴くがよい、わたしはすでに不死の法を得たのである。わたしはいまそれを教えよう。」と両三度にわたり押問答しても、五人のうち誰一人として、それを聞きいれようとせず拒否したというのであります。

生身の如来、世の応供、覚者釈尊

にえらばれた彼等さえ、まのあたりその姿を見、至誠こもるその声を耳にしなから、拒けたというのであります。

皆さん、このことをどうお考えになりますか、考えてみると、まことに空恐ろしいことではないでしょうか。仏様に会えたらさぞかしと考えている私ども自身が、実際現実に、仏にまのあたり遭遇し、その声を耳にしなから、しかも気付かないことがないとは云えません。いや、毎日、或は只今、仏に直面しているのかもしれませんが、私どもが心に描き、会えるかと期待している仏は、とんだ仏違いであるかもしれません。

弁栄上人も、「如来の在^{いま}さざる処なきが故に、今現に此^こ処に在^ます……」「我等は曾て心闇くして、如来の在^{いま}ますことを識らざりき、然るに如来の、大悲招喚のみ声に驚きて、至心に、如来に帰依し奉れり」と教えられます。

法華経にも、「如来は、常に、此処

に住して法を説き、衆生に語り、毎に、何を以てか、衆生を無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得せしめんかとの念を作す。」と説かれています。

まことに、仏に会うという問題は、仏の側よりも、会いたがつていゝるこちら側に重大な問題があるようであります。

さて、釈尊は、五人の比丘に対して、「比丘たちよ、では、なんじらは、今より前に、私の顔色がこのように輝いていたのを見たことがあるか」とおっしゃったそうであります。その光々しい容顔にうたれて、はじめて彼等は、釈尊の言葉を聴く氣に傾いたと経典は伝えております。これも大変味わうべき意味深い事であります。

さて、この仲々きく氣にならぬ相手の心をして、聞く氣に転ぜしめた顔光はどこに由来するのでしよう。弁栄上人のお言葉通り、「教主世尊が六根常に清らかに、光顔永しなえに麗しく在^{いま}しは、

内^{うち}靈^{れい}應^{おう}に充ち給いければなり。」であります。

そして、私どもの信仰は、「^{いまわがからだ}今我身体は、如来の靈^{れい}應^{おう}を安^{やす}置^どすべき宮なりと信ず、諸々の聖者の心宮に在^{こころ}しし如く、常に我等が心殿に在^{こころ}らせ給え、今や己が身を献^{けん}げて、至心に如来の靈^{れい}應^{おう}を勧請し奉る。靈^{れい}應^{おう}常住に我心殿に在^{たかみち}まして、転法輪を垂れ給え。」と、至心に念仏することを教えていただいているのであります。

まことに、私どもは念仏生活の中に、会いずめに会っている仏を拝み、説きずめに説いているみ声を聞くのであることを忘れてはならないと思います。

(一九六四年三月)

仏さま

中野善英上人
仏さまとは どんな人だか
見たこともない

声にも 音にも

聞いたことがない
今ドコで何をやっていられるのか
信じようにも 信じられぬ存在だ
と思っていたら
この花も このコップも
このパンも この服も
あの山 あの月 あの雲も
一切が同時に仏であって
それ等が統一し 相関 相即 相
応して
一大活動 一大理想を実現してい
るのであった
私もその手足となっている一環で
一環であるから 全体の理想を
この小部分で また現はしている
のです
そうだ無計画に ただ食っているだ
けの存在ではない
「吾が生」は「天地の生」と共通し
吾が活動は
天地を救ひ 天地を活かす働きで
なければならぬ

唐沢山眞生修養会

参加者

平成二十九年八月一日(火)

(五日(土))

青 森 石 田 孝 信
東 京 土 屋 正 道
東 京 大 田 眞 祐
千 葉 巻 田 和 男
東 京 野 田 弘 子

東 京 諸 澤 正 俊
埼 玉 土 田 晃 弘
神 奈 川 邱 玉 燕
東 京 佐 藤 利 恵 子
千 葉 服 部 道 子
東 京 上 田 密 記 子
愛 知 戸 田 好 子
柏 崎 柴 野 正 志
埼 玉 森 恵 子
ド イ ツ シ ヴ ィ テ ッ ク
ベ ア ー タ



光道上人の分骨を眞生碑横の佛塔に納骨



第六回「京都の中心で仏の名を称える」

清浄華院二十四時間

不断念仏会

二〇一七年九月三十日十三時
～十月一日十三時にかけて第六回
「京都の中心で仏の名を称える」
清浄華院二十四時間不断念仏会を
開催いたしました。参加・中継をし
てくださった方々、また賛同・応援
してくださった方々のお陰を持ち
まして成満させていただきました。
誠にありがとうございました。

期間中、会場には一二〇名もの
方々がご参加下さり、共に念仏行
に励み、また内外合せて一八カ所
から念仏中継をインターネット配
信いたしました。

二十四時間不断念仏会は、宗祖
法然上人が「南無阿弥陀仏と称え
たまえば、住所はへだつといえど
も源空と親しとす。源空も南無阿
弥陀仏と称えたてまつるが故な

り」と仰せのように、念仏によつて
つながれる和合の集いができるこ
とを目指して、できる限り続けて
いくことを念願しております。今
後ともご支援のほどよろしくお願
い申し上げます。

合掌

念仏中継場所

九月三十日(土)

◆十三時～

ラハイナ浄土院(ハワイ)

原 源照上人

◆十四時～

カバア浄土院(ハワイ)

石川広宣上人

◆十五時～

清浄華院↓

佛教大学 念仏行脚

◆十六時～

佛教大学礼拝堂

◆十七時～

清浄華院不動堂

松田道観上人

◆十八時～

スタフォードシャー

(イギリス)

◆十九時～

阿弥陀寺(オーストラリア)

ウィルソン哲雄上人

◆二十時～

志明念佛之家(台湾)

リリー・黄氏

◆二十一時～

クリチバ日伯寺(ブラジル)

大江田晃義上人

◆二十二時～

清浄華院(大殿)

◆二十三時～

ヨーロッパ仏教センター

(フランス)

高僧光隆上人

十月一日(土)

◆一時～

サンアントニオ(アメリカ)

エリック・コーベン氏

◆四時～

ハワイ浄土別院(ハワイ)



清浄華院から佛教大学まで行脚中継



ラハイナ浄土院より中継



清浄華院 大方丈 10月1日

◆五時

植柴祐文上人

イビウーナ日伯寺(ブラジル)

櫻井聡祐上人

◆七時

モントリオール(カナダ)

豊田 悠貴氏

◆八時

長昌寺(大分)

今井英之上人

◆十時

坡州市靈妙庵(韓国)

◆十一時

観智院(東京)

飯室谷の風

武蔵村山市 諸澤 正俊

「松禅院仲秋念仏大会」に参加
するため、九月五日から七日まで
比叡山に上がりました。

雨模様でくずついた日が多く、
仲秋の名月下の念仏は叶いません
でしたが、初参加の当念仏会から
得たものは小さくありません。

伝教大師最澄が残した歌に

「おのずから すめば持戒のこ
の山は まことなるかな 依心よ
り依所」があります。

私はこの歌を、行の場所を選ぶ
ことの重要性を訴えた、と理解し
ております。

唐沢山阿弥陀寺念仏修養会でも
同じことが言えます。「念仏の聖
地」と言われる場所には、その場



松禅院 一味仏塔前



山岡上人による大念仏

発展させたものであります

内容的には、「呼吸と脈拍を基とした発声法によって、大音声を発し、全身が一体となり、天地の大生命活動に貫通して心身の大調和を招来する念仏である」と説かれている。

私はそこまで達してはいないが、大念仏のあとは何故か、心身共にすっきりした自分を感じます。

大会期間中に、水道から水が出なくなるハプニングが発生しました。聞けば水利は自然の川から直接で、大雨の時は枯葉で取水口が詰まってしまうとのことでした。

夜遅く隣りの不動堂の湧き水を、ペットボトルにて運び急場を凌いでおりました。

夜が明けてスタッフの皆さんが、カップ長靴姿にて沢に登って補修して、水利は復旧いたしました。

今回は客人扱いで参加した感も有りますが、中野善英上人お隠れ後、大勢の先輩道友が、必死にこの会を支えてきたことが理解出来

ました。

「次の参加までには必ず大念仏をマスターするぞ」と自らに誓い、飯室谷を後にしました。

合掌

秋彼岸会参加者

九月二十三日

東京 土屋正道

北野昌子

久米晴彦

小島清一

萩原雄吉

廣田敦子

黒田敏広

小高美津代

吉田晶子

林武則

林秀行

宮木美知子

中村立道

諸澤正俊

岡田典幸

村涌亮

千

葉

土屋由恵
江草喜美子
服部道子

小岩井香子

矢崎勝彦

矢崎恵美子

土田晃弘

酒井正空

福田哲也

福田由貴

埼玉 野玉

長



眞生同盟新役員就任

観智院名誉住職・眞生同盟主幹
土屋光道上人遷化に伴い、十月十三日に眞生同盟理事会を開催し新役員を選出、即日就任いたしました。
新役員は以下の通りです。

理事長（主幹兼任）

観智院住職 土屋正道

副理事長（副主幹兼任）

空席（順次選出）

常務理事

長野 古田幸隆
東京 福田哲也

理事

埼玉 土田晃弘
千葉 服部道子
東京 谷口英夫
秋田 加澤昌人
東京 萩原雄吉

主 事（事務局）

大阪 森島米史郎

事務局長

東京 諸澤正俊

出版編集長

埼玉 酒井正空

会 計

東京 田中典幸

監 査

空席（順次選出）

顧 問

青森 石田孝信
東京 佐藤利恵子

芳志感謝

一万五千元

一万元

五千元

三千元

二千元

静岡 高田幸男

富山 村井敏夫

秋田 加澤昌人
（敬称略）

至心に感謝申し上げます。明年
もご支援よろしくお願いいたしま
す。

会費納入のお願い

平素は眞生同盟（真生会）の活
動にご理解ご協力を賜わりまこと
に有難うございます。

次年度の眞生会会費（四月から
翌年三月までの一年間分、二、〇
〇〇円）を平成三十年四月から同
年十二月までに納入していただ
けますようお願い致します。